東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2006 年 8 月 11 日

ま じ な い

親愛なるムスリムの皆様。アラビア語で「シヒル」と表現される「まじない」は、人々をひきつけ、自然の法則に逆らう事象を生み出し、人を誤らせる技術といえます。まじないは、物質的、精神的媒介を悪用し、なんらかの意図を達成しようとする企てをも含みます。

クルアーンでは、まじないについて様々な形で言及されており、それらの章句においては特に、アッラーが預言者達、そして預言者ムハンマドに下された啓示は真実であり、この預言者達がまじない師や魔術師でないことが明白に述べてあります。また、過去に、預言者達に対してまじない師達が示した対立、中傷についても触れられ、まじない師たちが救いのない嘘つきであり、策略家であることが示されています。ハディースにおいても、まじないを行なうことは７つの大罪の１つであるとされています。

ムスリムの皆様。まじない師の起源は最初期の社会にまでさかのぼるほど、長い歴史があります。それは根本的にもうけの為に行なわれるもので、宗教や神聖なものと見なされることはありません。まじないにおいては、神の意志や力を超越したところで物事を調整できる、というものの見方が存在します。しかし実際には、アッラーの望まれること以外、まじないが誰かに害を及ぼしたりするものではないことは、クルアーンの雌牛章第１０２節で明らかにされています。「だがかれら（悪魔）とて、アッラーの御許しがない限り、それで誰も害することは出来なかった。」

もちろん、アッラーは常に、ご自身に庇護を求め、ご自身に敬意を払い、イバーダと命令への服従に最大の努力を示すしもべたちを、あらゆる苦しみ、災い、災難、から守られます。だから信者は、「庇護を求める章」とされる黎明章(アル・ファラク)、人々章（アン・ナース）をしばしば読み、寝る前にはアーヤトル・クルシを読み、アッラーに庇護を求めなければなりません。

親愛なるムスリムの皆様。イスラームは、たとえよい意志を持って行なうことであろうと、まじないを行いこと、まじないをさせることを大きな罪と見なし、強く戒めています。まじないの的中や影響力がどれほどのものであるかという議論は脇においても、イスラーム学者達はムスリムがまじないを行なうこと、行なわせることをハラームとしているのです。

まじないを行なわれたとして、人がその影響から救われる為、それを職業としている人を頼るのも、避けるべきことです。まず行なうべきことは、アッラーに庇護を求め、ドゥアーし、貧者にサダカを払うことです。アッラーはそれらによって、その人を災難から救われるでしょう。一方、学者や、神に対する畏れを抱き罪を避け、信頼できる人が、まじないの被害にあった人の救いになるならば、そこから益を得ることには支障はありません。